

情報管理に忙殺される看護師の業務

サモアでも看護師の業務の一つに「情報管理」があり、看護師は常々膨大な資料の記録とその整理に追われている。たとえば個々の患者カルテには氏名、集落、族長などが書かれた表紙がつけられ、フォーマットに沿った対象者の病歴やアセスメントが記入されている。これらは、床から天井まで届くカルテ棚にぎっしりと詰め込まれ、専用のカルテ室に保管されている。室内の机には収まりきれなかったカルテが今にも崩れるのではないかと、思うほど高く積み上げられており、看護師が記録するスペースもない。また、サモアにはどこのオフィスにも赤い厚紙の表紙がついた分厚いノートが定番の台帳として使われており、病院でもそれが「患者台帳」とされている。看護師長には、週に一度はこの台帳を保健省に持参し、診療報告をする役割がある。ある時、筆者は看護師長と出かけたところ、師長は対向車線から来た保健省の職員を見つけるやいなや窓越しに台帳を手渡し、その場で報告をするという場面にも出くわした。

地方病院にも最新のデスクトップ

ところで大洋州では近年、中国からの多大な国際支援が入り込んでおり、サモアの医療もその「恩恵」にあずかりつつある。2年前、ある地方病院を訪ねたとき、使い古された地域巡回車輻が、いきなり大きな新車輻に換わっていた。念願だった新車の導入がかない得意げな看護師長は、冗談交じりに「今度は日本からラップトップがもらえるかな?!」と笑った。翌年、師長からのさらなる挑戦をかわす言い訳に筆者が頭を悩ませる間もなく、最新のデスクトップ・パソコンがプリンタとともに中国から供与されていた。サモアの看護師がこれまで外来診療や地域巡回の傍ら、情報管理にそれ以上の時間や労力を費やしてきたことを思えば、パソコンの導入は大変喜ばしいことだ。しかし、現在、未だにそのパソコンは看護師長室に鎮座したまま、師長は往復に半日もかかる首都へと週に2度、3度も出張し、スタッフはしばしばランチもとれずに、相変わらず大量の記録と格闘している。

伝統文化の中で尊敬されるサモアの看護師

サモアの国民の間でもスマホが先進国並みに普及する現在、未だに病院ではパソコンがその機能を発揮できていないのはなぜか。筆者がまず考えついた理由は、価格の高さや気候風土を含めた維持管理の難しさであった。しかし、国立病院では既に数年前からパソコンが導入され、インターンの看護学生がほぼ一日中、目の前のパソコンで器用にトランプ・ゲームなどを楽しみつつ、今も処置室で行われるデータを患者台帳に記録している。つまり機材やそれが使いこなせる人材、時間などの条件は、パソコンの活用や普及にはほとんど関係しないということか？ 筆者のさらなる問いに、病院の看護師、看護学生、大学教員らはあえて明確な回答を避ける。サモアの看護師の中にはすでに60代、中には70代を超えるのではないかと、と思われるベテランが多く、定年退職年齢も実際にはあるようで、ない。サモアの伝統文化の元では、子どもたちは家族や学校、地域社会で厳しくしつけられ、親や年長者を敬い、従順に育つ。そして、看護師のような高い教育を受けた専門職者は「エリート」として生涯、尊敬される。つまり、現時点で筆者に言えることは、サモアの看護師たちが膨大な記録とその整理、報告に忙殺される姿は、もうしばらく続きそうだとということである。



部屋の四方を埋めつくすカルテ棚